

辺戸集落散策路と蔡温松並木保全公園

辺戸集落の東側にある散策路は、15 世紀から 19 世紀に栄えた琉球王国の尚氏王朝の時代に作られました。散策路の一部は、那覇の首里城からの使者が毎年 12 月のお水取り（water-fetching）の儀式のために旅した道です。使者は、琉球で最も古い御嶽とされる安須森御嶽（辺戸岳）に供物を捧げ、辺戸の東のウッカー（大川）に流れる神聖な水を受け取ります。

お水取りの儀式は、神アサギとして知られる神聖な場所で始まります。使者は、儀式に使う祝女殿内（ヌンドウンチ）で集落の祝女（ヌル）から若水を正式に受け取ります。琉球王国そのものはもはや存在しませんが、お水取りの伝統は、一時中断された後復活し、辺戸に多くの来訪者を呼び込んでいます。

神アサギや祝女殿内、そしてシヌグゾと呼ばれる祭りのスペースなどの史跡は今でも散策路沿いで見られます。これらの史跡の中には、義本王の伝説に登場する作久眞家もあります。伝説によると、13 世紀の統治者義本王は、退位して辺戸に逃れました。そこで彼は佐久眞家の娘と恋に落ちました。彼らの幼い息子は密かに伊是名島に連れ出されました。彼はここで 1470 年に第二尚氏王朝を創始した尚円の祖先となったという人もいます。佐久眞家は代々亡命してきた王が眠ると言われている辺戸集落の北西にある陵墓を守ってきました。